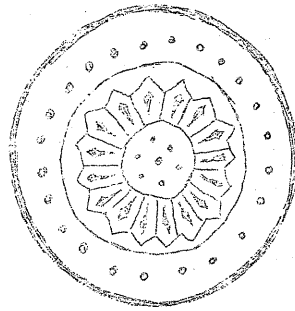


大宰府史跡

昭和44年度発掘調査の概要



1970-5

福岡県教育委員会



I 昭和44年調査の概要

昭和44年度の調査は、44年5月20日、21日の両日に開催した大宰府史跡発掘調査指導委員会議で、昭和43年度調査の中門、南門地区の下層遺構の調査、南門前面の外堀地区1000㎡、学校院跡1000㎡、観世音寺僧坊跡1000㎡の4地点が予定された。しかし地元の史跡の拡張指定にからんでの私有地の発掘に反対する強い意向があって学校院の発掘は道路予定地60㎡を除いて断念せざるを得なかった。又蔵司西方の宅地にかかわる土地約4500㎡について緊急調査があり、観世音寺僧坊跡の調査も見送らざるを得なかった。

1. 第1次調査補足

昨年度の中門及び南門跡の調査では現在の地表に見える礎石が創建当初のものでなく、大きな火災のあと、ほぼ10世紀頃に再建されたもので、その下にまた礎石があることがわかった。今年度の補足調査では更に下層を発掘し、掘立柱の建物、柵列を検出した。

中門では掘立柱建物4棟、柵4列があり、これは少なくとも3期にわけて造営したと見ることができる。

更に掘立柱群を検出した整地層の下から、4m×5mのほぼ隅丸方形の竪穴住居址を発見した。出土遺物から6世紀末頃

のものと考えられる。

南門では礎石を置く場所を大きく掘り込み、土を瓦層に積んでいるため掘立柱の検出は部分的に限られたが、中門と同様当初の遺構としては、掘立柱のそれが考えられる。

2. 第2次調査(外隍地区の調査)

第2次調査は南門の前面、外隍部と推定される、約1000m²について行った。

当初予想した外隍については、これを確認することができなかった。調査が進むにつれ、南門の東端部を破壊し、南門の前面で西に迂回する大きな川の存在を確認したが、外隍は恐らくこの川によって、少なくとも南門の前面部については完全に削られてしまったものであろう。この川はかなりの土砂を運び何度か流路をかえている。その最下層の流路についてはいわゆる「しがらみ」で護岸し、遺物からするならば平安時代末期にはすでに存在している。従来問題視されてきた五条にのると考えられている現在の道路が、大宰府政庁の前面で大きく南に迂回している点についても、この川の存在と結びつけて考えることが妥当のようである。

3. 第3次調査(学校院地区調査)

学校院地区の調査は、ほとんど私有地である関係から、地

元の承諾等まだかなり困難な問題があるが、町の道路改修に伴ってその一部を地元との話し合いの上で調査することができた。調査面積も60㎡でもとより完全な調査を望むべくもないが、その結果大宰府政府の前面に通ずる現在の道路から約5m北側に大きな堀の存在を確認した。深さは約1.8mにも達し、堀の南岸は確認できなかったが、現在の道路も恐らくこの堀の上にのるだろうと推測される。今後大宰府の条坊を考える上で一つの問題にもなり得よう。

4. 第4次調査(蔵司西地区の調査)

蔵司西側、西ヶ浦池の南に連なる水田約450㎡、現在も調査中であるが、西ヶ浦池の低い水田は明らかに南に流れ落ちる水路である。西側の岸では石で護岸した形跡がある。この水路からは木簡が1点出土している。水路の西側の台地では南端部に東西に走る築地を検出した。恐らく蔵司地区の南端部に連なるものであろう。

Ⅱ. 遺構

1. 第1次調査補足

中門東半部で7間×4間の四面廂の掘立柱建物(SB042)を検出した。柱間は2.1m等間で廂部分は1.8mである。この建物から柱根を2本検出した。更に発掘区の東北隅に四面廂の建物に先行する建物(SB043)の一部が存在する。補足調査の段階に入ると瓦がほとんど出土しない状況から、恐らく瓦葺きではなかったろうと思われるが、東北隅の建物の柱穴の底から平瓦を検出した。これ等の建物が存在した時期は、その建物位置からして、この場所では中門という機能は意識されていないと考えられる。

更に中軸線を意識した形で並ぶ南北方向の柵(SA039, SA040)柱間にはば2.4m等間である。この時期には発掘区の東南隅(SB041)及び西南隅(SB047)にそれぞれ掘立柱建物があり、北側には東西2列の柵(SA044, SA045)がある。

これらの掘立柱建物の時期については、明確に遺構に関連する遺物もすくないが、中門西側で検出した長頸壺はAD700年前後までさかのぼり得るものであろう。

南門では最終段階の門基壇が下層の基壇よりも約60cmはばかりそれぞれ拡張していることは昨年度の概報でもふれたが

下層基壇は基壇南側で東西26mと最終基壇のそれと等しく、北側では東西それぞれ60cm、計1.2mだけせまくなっている。最終段階の基壇の拡張は、高く土盛をすると同時に南側の長さに北側の長さのそれをそえたものであろう。

南門の礎石は、中門のそれと異なり礎石位置をかなり大きく掘り込み、根石を置いている。礎石位置は下層のそれと上層基壇のそれでは、ほぼ同位置と言ってよい。上層の根石の下はほぼ同位置に下層の根石が確認されている。

南門地区の掘立柱については先に述べたように全体にわたっては明確には検出されないが、ほぼ確実に掘立柱の時期があったようである。基壇の西側には北から南に抜ける築地以前の溝がある。

2. 第2次調査

大宰府政方に直接結びつく遺構はほとんど検出されていない。先に調査の概要で述べたように、外堀は南門前ではほとんど削られ間欠的ではあろうが、かなりの流量の川が平安時代末期には南門の前面を流れていたことになる。護岸のしがらみは、1mほど50cmの間隔で打ち込んだ杭に雑木をめぐらしたものである。

3. 第4次調査

調査区の台地部で検出した築地は、基底部で幅約4m、都
府地区での南門に連なる築地と類似している。断面でも基
部しか確認できないが、掘込み等の手法は使っていない。北
側に側溝を設け、南側は急角度に落込み現在の落差のある地
形の原形をなしている。一部には黄色粘土が積まれ築地の中
部部にかなりしっかりした柱穴があり門等の可能性も否定で
きない。築地の北側は、かなり荒廃し小水路がいくつか集ま
り東に流れ出しわずかに山際に若干の掘立柱を検出した。

西ヶ浦池の南に連なる低い水田は、水路の跡であり、ここ
の埋土中から木簡が出土していることは先にのべたが、この
水路は何回か流路を変えながら中世頃まで存在していたこと
が出土遺物からも知られる。従って本簡の残りうる条件は、
水路自体が急傾斜するという点からもかなりうすいといわれ
ばならない。

Ⅲ. 遺物

1. 第1次調査補足

a. 土器

南門、中門地区では、土器のほとんどは整地層に包含されていたものである。そのため土坑、井戸などに多数含まれている土器などによくみられるように、ある特定の一時期を示すまとまった資料といったものとは性格がやや異なる。また土器は、門という非常に散漫な出土状態を示し、かつ量も少ない。しかしながら、中門西地区SC022回廊の一群の土器および灰層中の土器などは一定の基準となり得る。

出土した土器は、土師器、須恵器が大部分を占め、青磁、白磁器および緑釉陶器がわずかにみられる。器種は、土師器では、杯・椀・皿・甕・高杯、須恵器では、杯蓋・高杯・壺・長頸壺・甕・硯などである。全体として須恵器は土師器と比較して少ない。

また大宰府創建以前の古墳時代前期および弥生式時代の土器も検出した。

土 師 器

土師器全体を通じて、器形では圧倒的に皿・椀が多く、なかでも皿はかなりの量を占める。また層によって皿・椀の出

土する比率が異なる。中門西地区において顕著にみられた灰層に例をとってみると、灰層の上には皿が多く、灰層の下や瓦溜りでは椀が多い。これらの椀は高台のつく器形で丁寧なつけかたをしたものと雑なつけかたをしたものにわけられる。高台のつく皿は少ない。「乞」の墨書のある皿を灰層の中から検出した。

甕は少なく、しかも小破片であるが、下層には完形品がある。特に創建以前の土壇から一群の古式土師器出土している。

須恵器

検出した須恵器のうちには古墳時代のものがかなりの量にのぼる。これらのものを除けば、創建当初と考えられる整地層からは、杯、高杯、長頸壺などを検出した。これらは7C末から8C前半代に位置づけられる。またSC022 回廊から検出した一群の杯は、同一所で検出した土師器杯と同一の製作技法を示している。

瓦類

この地区では昨年度の調査でかなりの量の瓦が出土しているが、補足調査でも軒丸、軒平、文字瓦等の出土の傾向はかわらない。しかし整地層も下層、特に創建当初の整地層からは瓦類は全く出土していない。ただ最も時期的に先行すると

考えられる中門発掘区の東北隅の掘立柱建物の掘方の底から平瓦が出土しているのが注目される。

C その他の遺物

南門西地区の築地を南北に横切る溝中から滑石製子持勾玉を検出した。

その他、金環、鉄釘などを発見した。

2. 第2次調査

遺物は川の流砂の中に、土器、瓦、木製品など多種にわたって検出した。その主要なものを記しておく。

土 器

須恵器が多く、土師器は非常に少ない。しかし土師器小型皿の底部に糸切り痕あるいは縷状圧痕のあるものが認められた。須恵器は古墳時代のものから平安時代のものがみられる。さらに下部の砂層中から検出した青磁器の底部に「上」の墨書がある。

瓦 類

瓦はもとも出土量が多く、丸瓦、平瓦片で、セメント袋約600袋の量にのぼる。軒平、軒丸、文字瓦等については多くは南門の瓦が落ち込んだのであろうか。第1次調査の傾向とほとんどかわらない。しかし、やや上層からは鎌倉期と

考えられる巴瓦が1点出土している。

その他の遺物

円面硯、ふいごの羽口、墨のついた羽子板状木製品、下駄曲物のおそらく蓋と思われるものなどを発見した。さらに漆器椀、釣針、および鏝銭「熙寧元宝」など室町期の遺物を検出した。

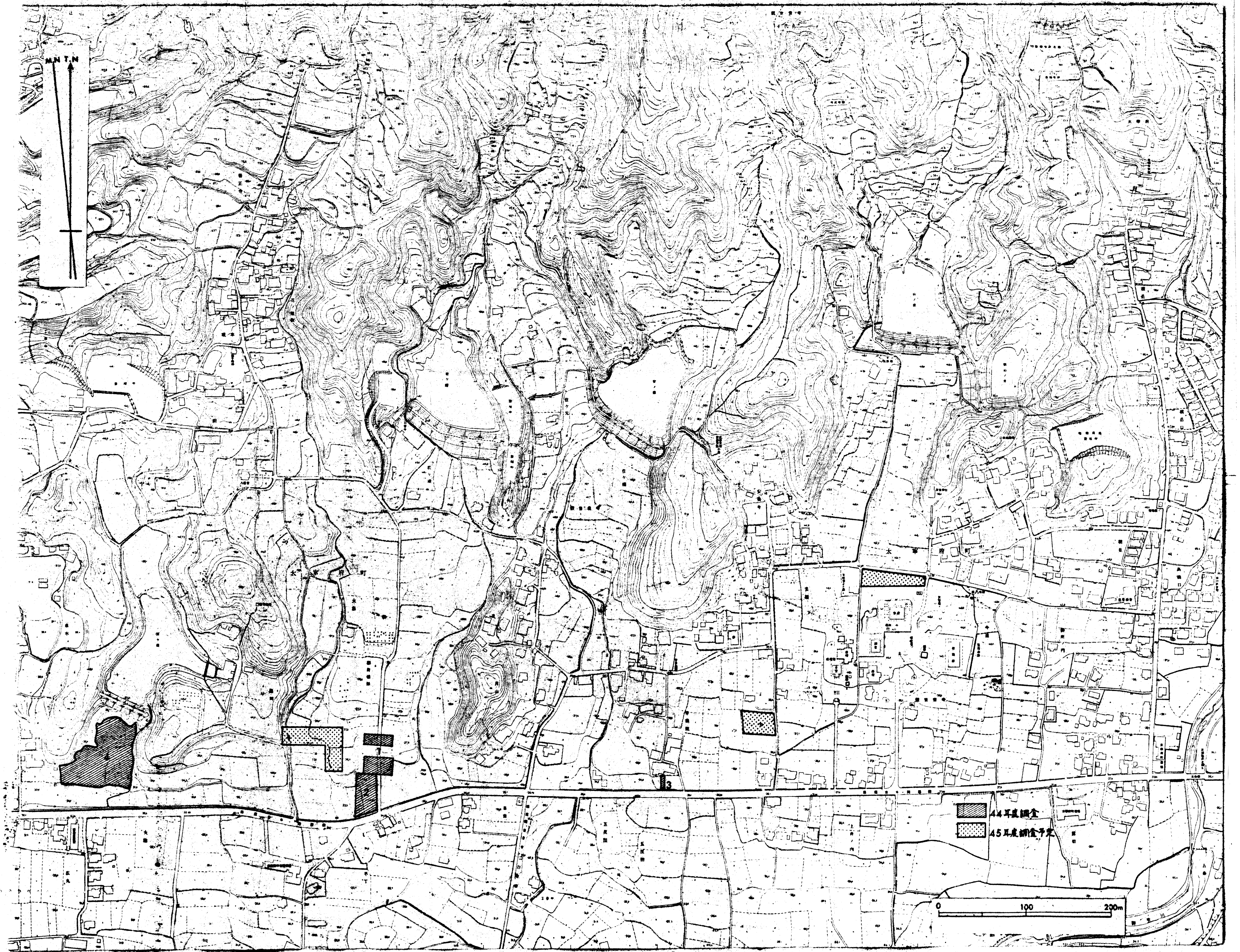
3. 第4次調査

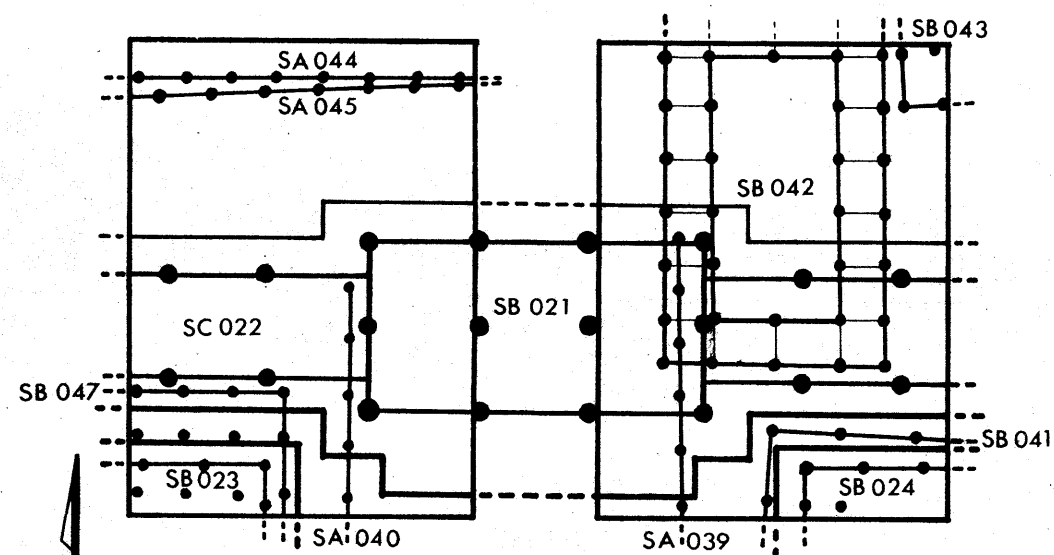
蔵司西の西ヶ浦池の南に連なる水田から木簡が1点出土した。南に流れる水路の岸近くの埋土中から検出されたものである。墨書はあざやかにみえる。現在長16cm 巾4cm

表 「----- □□疾病為□」
依カ

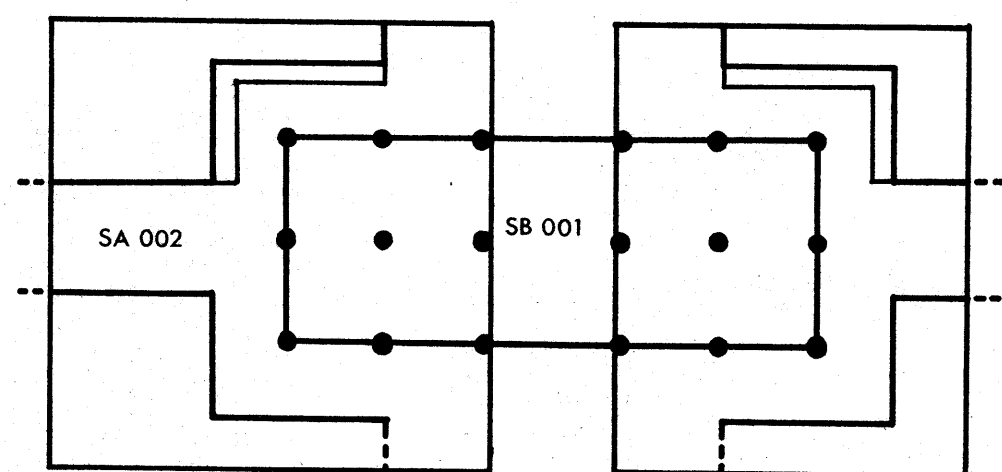
裏 「----- 日下部 牛-----
里長日下部君牛曾」

その他、須恵器杯の底部に「一」の墨書銘のある土器を発見した。

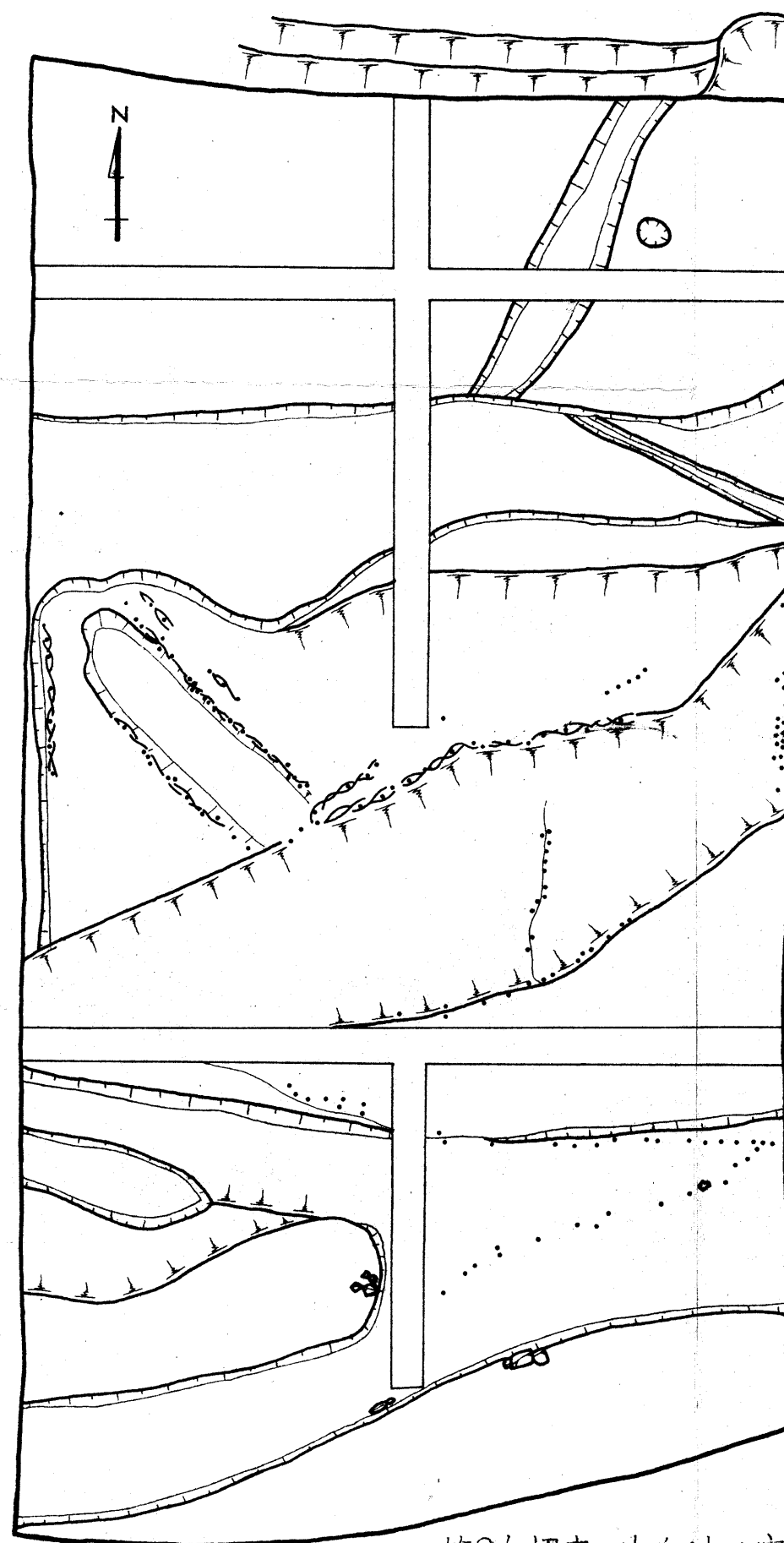




6AYT-H

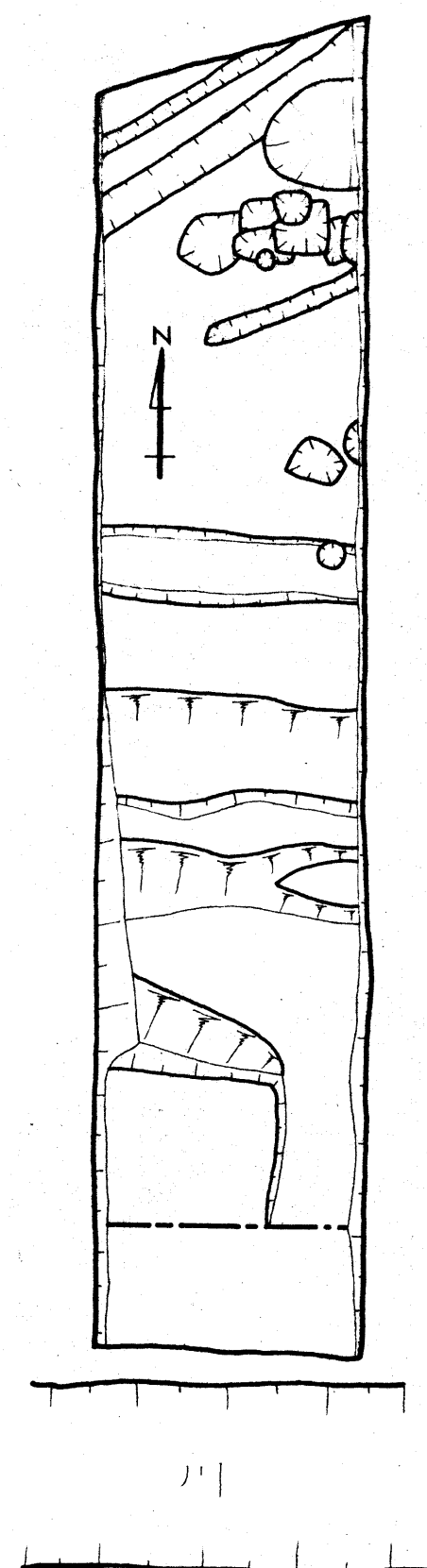
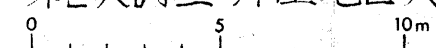


第1次調査 南門・中門地区検出遺構配置図



6AYT-I

第2次調査 外堀地区実測図



第3次調査 学校院地区実測図

